

冬の日の保育

—雪とHちゃん—

田村満紀子

あまりの上天気に、室内に入るのはもつ
たいたい。そのまま、みんな光の子になっ
て、外気で遊びます。新しき道発見……と
白雪をふみ歩く子。しゃがみ込んで、雪を
かため雪ダルマを作る子などいろいろ。

「先生、何やってるの？」雪の中に、顔を
うずめている私に、元気な声。顔を上げて
みると、首をかしげたAちゃんが立ってい
る。「こうやってね、雪に顔うつしてるの。」
「えっ、あっほんとだ、顔だ」雪の中に、
凹版にはったような顔がある。「ボクもや
ーろうっと。」次々に、真似っ子さん達がや
って来る。「ひゃっこくて（冷たくて）気
お姉さん。
そこへ「田村先生みーつけた！」と、し

がみついて来たHちゃん。いつも、「Hち
ゃん」と呼ぶと、「センセ、どこ？」と声
のする方を探すのに、どうしたのでしょ
う。「どうしてわかったの？」とききたい。
「青だから田村先生！」私の心を見ず、か
したような返事です。いつも、おどけた答え
方をするHちゃん、今日は、全身で喜びを
表現しているようです。普段、青っぽい服
装の私。カラーで区別出来たのです。

Hちゃんは、裸眼〇・〇〇一位の弱視。
その上、眼底が振動するという悪条件のた
め、メガネをかけても見えにくい状態とい
います。そのHちゃんが雪の中で、喜々と
して動きまわっているのです。いつもは茶
色っぽい地面に立っているのに、今日は
一面銀世界。ちょうど真白な紙の上に、クレ
パスをのせたように、彼女にははっきり見
えたのでしょうか。

八戸地方は、からっ風と、ガリガリに凍
りついた地面。耳がいたくなるようなキリ

キリした寒さ。素手で鉄棒をにぎったら、

走りまわっています。子供達は勿論本気。

衣を着てるんでしょ」「そう」

手がくっついてしまうような寒さも時には。ですから、かえって雪が降った方が暖かいのです。そして、遊びの種類も急に増えて来ます。この積雪を、子供達も教師も、

こちら本気でないと、多勢に無勢でかたいません。もう、暑くて暑くてたまりません。「タイム、タイム」雪の上に、ドテソとひっくり返る。目に入るのは、どこまでも高く澄みきった大空。

「H子にもみえる」と、まぶしように、目をしょぼしょぼさせながら、いつものちよつと甘えた声。「そう、Hちゃんにも見えた。よかったねー」(Hちゃん、お心の目を見たのね。目があっても、美しいものを美しいと見れない不幸な人より、Hちゃんは、何と幸せでしょうね)

心待ちにしていたところなのです。大喜びの子供達。でも、その中でも、Hちゃんのはりきりようは群を抜いていました。どうやってうれしさを表現しようか、表現法がわからないといった様子。それが、こちらまで、伝わって来るのです。

「早く又やろう」といたずらっぽ目からのぞき込む。「みんなも寝てごらん。気持ちいから」「どれどれ……」。冷たい風も、こ

もう少し、豊年祈念の「えんぶり」の笛やタイコの音が聞こえて来ることでしよう。

「田村先生に雪ぶつけろ」と、リーダーになって指令します。さっきから、あちらこちらで雪投げが始まっていたのが、急にこちらへ集中攻撃。あまりサラサラしすぎて、球にもならない雪。でも、みんな追っかけては投げつける。こちら握っては投げ、握っては投げ、逃げたり追っかけた

「あるわよ。おいしいものね」「ウン」「あれ? あそこにイエスさまみたい」「どこどこ?」「ほらあそこ」「本当だ。ピデオのイエスさまみたい」なるほど、手をひろげて立っていらっしやるイエスさまのよう。

雪の少い八戸にも、三月には、必ず「屋

り大忙し。Hちゃんは、昨日までとは別の子のように、大胆な動きで、あっちこっちと

「本当似てる似てる、こちらが頭で、白い

が溶けないと、本当の「はちのへの春」がやってこないのです。

「本当似てる似てる、こちらが頭で、白い

「本当似てる似てる、こちらが頭で、白い

「本当似てる似てる、こちらが頭で、白い

「本当似てる似てる、こちらが頭で、白い

「本当似てる似てる、こちらが頭で、白い

「本当似てる似てる、こちらが頭で、白い

(青森県・八戸幼稚園)